導かれるままに

2005年度　博士前期課程修了　館昌彦さん

薬学部からの進学でしたねー

　学部4年で原田先生の研究室に所属が決まったとき、先生から1年では無理な、結構大きな研究テーマを与えられたんです。だから、まあ言ってみれば大学院も含め3年契約みたいな感じでした。大学院に進学する気持ちは、初めはなかったですね。だからと言って、4年で卒業して薬剤師になりたいという気持ちもなかった。

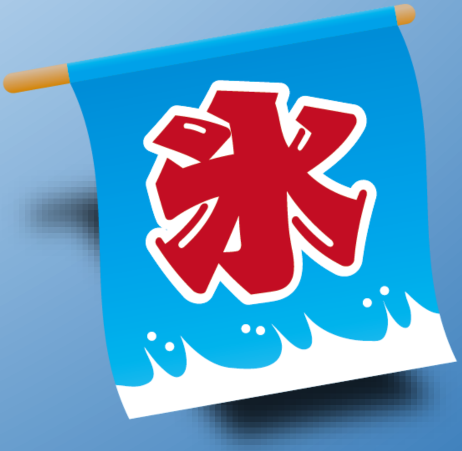
　「目的があってこれがやりたい」というのはなく、「導かれるままに」でしたね。多分、断ることもできたんだろうけど、原田先生って、結構押しが強いし（笑）それじゃあ、先生に鍛え直してもらおうかな、と。

文系の授業はどうでしたかー

　新鮮な気持ちで受けられました。特に、馬場先生の人間学特論の授業はインパクトがありましたね。先生の「心が輝く」の言葉は、「これは使える！」、と思いました（笑）平松先生の脳と心の授業も面白かったです。ただ、文理融合が自分にとってどうだったかは、まだわかりません。

研究室では、やらされるばかりでつらかったとー

　実験は見ているばかりでノートも取らず、先生や先輩に言われるがままでした。でも大学院に入って自分が先輩になったとき、改めて「自分は何にもできないな」と気づいたんです。先生にも「何とかしろ」とハッパを掛けられ、「あぁ、ちょっとこれきついわ。もうやめようかな」と。先輩にも「お前、病んでないか」と言われました。でも、原田先生には言えなかった…断る勇気がなかったんです。言えないまま、フラフラしてました。



それでも変わりましたね－

原田先生と何度もディスカッションをして、何となく見えてきたんです。自分のやりたいことが。実験も、目的を持ってやることができるようになりました。大学院の2年になった頃には、「もう、何やっているんだ」感から「やってる」感へ変わっていきました。そこが、総合学術研究科に入って得られた成果ですね。社会人の院生と違って、学部から上がってくる人は、勉強していて目的がはっきりしている人が少ないでしょ。だから、僕みたいな感じで入ってきてもOKなんです！原田先生に「やめます」って言えなくて良かった（笑）。

野鳥の変死事件とは何ですか－

兵庫県のため池で野鳥が死んだ事件があって、アオコが原因と疑われたんです。うちの研究室に調査の依頼があって、それで「お前、行ってこい」と言われ一人で行きました。鑑識さんみたいに水を採取して、マイクロシスティンという毒物があるかどうか分析しました。研究室からは外に出られるし、一人だし、楽しかったです。お土産は何にしようかな、とか（笑）

社会人大学院に入って研究を続けられるそうですね－

研究をやりたい気持ちが脱けきらないんですね。以前は研究がそんなに好きじゃなかったのに（笑）仕事や研究でその分野についての知識が増えれば、やっぱり面白くなってくるんですよ。自分が主体になってできるまでになれば、それが楽しくなってくる。僕は大学院時代を通じてそのことを知ったんです。面白くなるまではやらされている時期もあります。でも、それは「やらされている」けど、「いやいや」ではないんです。

最後に、後輩へのエールを－

自分で壁を作らずにやって欲しいですね。迷うと、どうしても心の中でブレーキをかけがちです。多分ダメだろうって。でも、やりたいことがはっきりしていなくて、迷っていたとしても、立ち止まらずに進んで欲しい。僕はそれを経験したんです。総合学術に来てよかったなと思うし。そこに行かなきゃ見えないものがあるんです。

インタビュー：6月28日(土)
場所：T-901教室
聞き手：総合学術研究科　鈴木茂廣